

インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.250

2026 年 9 月 18 日

発行所 兵庫教育文化研究所
〒650-0004

神戸市中央区中山手通 4-10-8

『いのちの危機を生き抜く』から学ぶ「語り」「継ぎ」 防災教育部会

7月10日、南あわじ市の中学校1年生を対象に、阪神・淡路大震災30年誌『いのちの危機を生き抜く』を活用した道徳の授業を実施した。本実践は、震災を経験していない世代に過去の教訓を伝え、「語り」を「継ぐ」ことを目的としておこなったものである。

現在の中学1年生は2013年生まれであり、1995年の阪神・淡路大震災はもちろん、2011年の東日本大震災も経験していない。また、学校現場においても被災経験のない教員が増えており、防災教育の継続的な実践や震災の記憶の継承が課題となっている。そのような中、本授業では阪神・淡路大震災30年誌『いのちの危機を生き抜く』に収録された当時の保護者や教職員の実践、感じたこと、思いに触れることで、震災の教訓を風化させることなく次世代へつなぎ、将来起こる可能性のある地震への備えについて考える機会とした。

授業では、子ども一人ひとりが冊子を読み、印象に残った実践や言葉を選び、その理由を班や学級全体で共有した。「なぜその実践に注目したのか」、「自分ならどう行動するか」といった視点で意見交換をおこなうことで、多様な考えに触れながら、防災・減災について主体的に考える姿が見られた。教員が一方的に教えるのではなく、子どもどうしが学び合う活動を中心に据えたことで、震災を知らない世代であっても、自分事として災害を捉えることにつながった。

また、この授業の特徴は、防災授業としての実践のしやすさにもある。特別な教材研究や専門的な知識を必要とせず、冊子を活用しながら子どもの対話を中心にすすめることができるため、被災経験の有無にかかわらず多くの教員が実践できる。防災教育に対して「何を教えればよいかわからない」、「自分に経験がないため伝えられない」と感じている教員にとっても、とりくみやすい授業形態であると考えられる。さらに、授業の最後に教員が結論をまとめないことで、子ども自身が考え続ける余地を残し、家庭や地域での話し合いなど実生活へと学びが広がることを期待した。

今回の研究会を実施した校区は淡路島南部に位置し、南海トラフ巨大地震の想定では、福良地区や阿万地区において津波による浸水被害が予測されている。

また、学校は地震発生時の拠点避難所としての役割も担っているため、子どもたちは幼い頃から地域の防災訓練や防災学習に参加しており、防災・減災に対する意識は比較的高い。しかし、災害への備えは一度学べば終わりではなく、過去の経験や教訓を継続的に学び続けることが重要である。

事後研究会では、震災当事者がその場にいらなくても、その経験や教訓を未来へ語り継ぐための授業づくりについて、活発な意見交流がおこなわれた。

阪神・淡路大震災から30年を迎えた今、震災を経験した人々の「語り」を受け継ぎ、その思いや教訓を未来へつないでいくことは、私たち教育に携わる者の大切な役割である。本実践が、防災教育へのハードルを下げるとともに、地域とともに命を守る力を育む学びの一助となることを願っている。

